

ノモスセイバー

山門の果たし討ちの件は、未だに話題にのぼる。

この話が出るたび、皆口々に「惜しい若者を亡くした」と嘆く。私もそう思う。今日も私のところへ来た番頭が、この話を持ち出した。

「これが番狂わせなのかねえ。それとも本当にあの刀は呪われていたんだろうか」

「さてね。私だってよく分からんのだ。ほいよ、この軟膏を塗るときゃ治る」

「でもあんたは一部始終を見ていたんだろう？」

「何度訊かれても、当人にしか答えようがない。……お前さんには唾で十分だったかな」

城下の噂なんぞ信じる方が馬鹿なのかねえ、と一人ごちると、番頭は外へ出て行った。

城下ではまことしやかに、うそぶいた風説が流れている。あの刀には呪を封じられていたのだと。どこから吹いてきた話なのか、少なくとも私は多くを語ってはいない。霊が憑いていたのかもしれない。今なら決してその風評が愚かな創作の類ではないと思うのだ。

世間では私は多少名が知れている。腕ではない。私はあの夕べ、あの山門下で、あの二人を観てしまった唯一の人物となっていたからだ。

起こりは昨年の晩秋に遡るのだろう。異国の船が漂着した。三十人ほどの姿があったが、息のある者は絶えてなかった。難破船であった。検分して把握できたことは、餓死者と傷病者が半々いたということだ。少ない食料を争って、内紛に発展したのだろうとまとめられた。

船には武器や骨董の類が積まれていた。商船なのだろうが、三本の帆と前後に楼閣が備えられており、およそ清や阿蘭陀の船ではないことは明らかだった。三弦に似たような楽器やら八十も張られた箏のような楽器やらが見つかり、おそらくは大陸でも清より奥地からやってきたのだろうと熊谷長玄殿は仰っておられた。

積荷の内にはあの刀もあった。宝物の類は江戸に送られることになったが、検分の後、再び返ってきた中に鞘付きの洋刀が混ざっていたのだった。

私も親交のある蘭学者の言によるなら、「血を好み、血を求める」と、鞘に刻まれていたのだという。決して縁起の良い刀ではなかったが、殿様はいたく気に入られたらしかった。

豪商の村田与兵衛と話をつけ、藩債返済の法を提案した中老の布施様は、その実績から殿様に重用されている。さらに布施様は蘭学の隆興を進言してもいた。その布施様に褒美としてあの刀が渡ったとしても、何ら不思議ではない。考えてみれば、刀を下賜することでこれからの藩政を任せるという意味合いを含ませていたのかもしれない。

正月の三日だったと記憶している。雪のこんこんと降る夜更け、布施様のお屋敷では宴が催されていた。そこへ忍び寄るのは、臼田景保ら三名の家臣たちであった。

彼ら是对立する家老、清水様の忠臣で、なおかつ招聘している朱子学の熊谷長玄殿に師事していた。清水様は黙して動かず、自身の地位が危うかろうと藩のためを思う人であったから、おそらく臼田らは独自の判断で屋敷に参上したのだろう。清水様が地位を追われれば、熊谷殿も藩を去らねばなくなる。次に布施派がはびこり、蘭学が興れば、自分たち清水派の人間も役職とは遠ざかる決定がなされるだろう。多分にこの一件は、それを怖れた家臣たちの勇み足であった。

しかし臼田らが何の言い分もなしにこのこと屋敷に現れるというのも可笑しな話。これも風評の類ではあるが、布施様が不正な密約を村田与兵衛との間で交わしていたという話があった。今となっては確かめようもないが、臼田らは裏を掘んでいたのかもしれない。

布施様とその派閥の家臣らは、開け放った障子戸からの雪景色を肴に酔っていた。臼田らが障子戸の合間から姿を現したとき、布施様に酌を取っていたのは、勘定役の若手である椎憲悟であった。

何事か、と屋敷にいた家臣らを取り乱したことは想像に難くない。ある者は酒

をこぼしたであろうし、腰にない刀をまさぐったかもしれない。

証拠はないが、臼田は懷から書き付けた紙を取り出し、「これは上意である」と言ったらしい。そして布施様に斬りかかって行つた。

その臼田を斬り伏せたのが、椎であつた。布施様の背後、椎が床框に置かれていた洋刀を抜くと、ものの一瞬で臼田は倒れていたのだという。残りの二人も臼田に倣い応戦しようとしたところを、椎によつて斬られた。その早業は藩でも右に出る者はないであろうと言われるものであつた。

この一件の後、清水様は切腹を命じられ、清水派は一掃されることとなつた。

それらの処分と並んで、布施様は中老から家老へと昇格し、側に仕えていた者たちもまたそれなりの役職を宛がわれることになつた。しかし人事で最も出世したのは、椎憲梧に並ぶ者はいないだろう。椎は勘定方吟味役として取り上げられることになつた。それまでは算盤を打たせても、刀を握らせても、人並以上にできた試しがないと思われていた。そんな椎が実は劍の達人であつたということは、その事件の規模と同様に、城内にも城下にも広く知れ渡つていた。ゆえにこの人事に文句をつける者もそういなかった。だが学があるわけでもない椎に務まるのか、それに不安がなかつたわけではない。布施様もそれを心配しておられた。

けれども驚くべきことに、椎はめきめきと頭角を現し始めた。学問に疎いと仲間内で揶揄され、吟味役など即座に御役御免と賭けの対象にされていたにも関わらず、当人は黙々と役をこなした。たまに抜けたところのあつた椎であつたが、その勤勉さと真面目さは人が変わったかのようにだつたという。

これには布施様もご満悦の様子、何か物として褒美を取らせたいと考えた。そこで殿様からお許しを得て、賜つたあの洋刀を椎に譲り渡すことにした。

椎は謹んで、洋刀を賜つた。これにより椎に対しての布施様の信頼は、城内の誰よりも厚いものとして位置づけられることとなつた。

もちろんあの一件より続く椎重用の流れに、妬み嫉みを抱く者は少なからず出てきていた。追い落とされた清水派の人間よりはむしろ、布施派の内から椎に関するあらぬ流説を吹聴する輩が現れた。

椎の偉いと思われるのは、噂などどこ吹く風、世上の流言などに心乱されぬところだという人があった。どこか達観したように、眉根を寄せて事物を窺う姿は未だに印象深い。しかるに椎は徳などではなく、理によつてのみ立っていた気がしてならない。

事態がにわかに動き始めたのは、卯月の暮れの頃合であつた。

清水派の処罰と共に、閉門を命じられていた熊谷殿が藩より追放せられるというお達しが出された。臼田らに学を授けたがゆえに、お家騒動に発展しかねたというのが言い分であつた。熊谷殿に責任を問い質し、何らかの処置を講ずることは、藩として当然であつたし、仕方のないことであつた。けれども何度か酒を飲み交わした間柄、幾分寂しいと思える心情は隠せなかつた。

この藩命に背いたのが、熊谷殿に学び、報徳の教えを実践する能見丙太郎であつた。財務に才があつたものの清水派に与していたがゆえに、能見は海沿いの閑所に飛ばされていた。しかし、このたび熊谷殿が藩を追われるにいたつて、とうとう腰をあげたのだった。

城内に乗り込み、直訴するも一蹴、けれども逃げ際に番方を四人、峰にて打ち倒した。

その翌日、能見は高台の荒れ寺に立て籠もっているという知らせが入つた。しかし、能見を討つにしても、適当な討ち手がいない。能見は江戸で一刀流を修めていた藩でも有数の剣客であつたからだ。

そこで持ち上げられたのが、あの椎憲梧であつた。椎ならば討てると、椎をやつかむ布施派の誰かが進言したのだろう。討てれば相応の地位を約束されるが、相手は能見である。逆に討たれることの危険の方が多い。布施派の思惑としては、対峙すれば斬り合いになり、討てたとしても一生物の傷を負うであろうし、よしんば討てずとも、相手に相応の傷を負わせることができるとの目測があつた。無論、刺し違えてくれれば、手間が省けて楽にことを運ぶことができるとの打算があつたに相違あるまい。

一両日の間に、椎は討ち手に選ばれた。布施様は椎に、成功の暁には小姓に取

り上げる旨を確約した。椎は喜ぶこともなく、「できることをするだけです」と肅々と答えたという。

昼九つのことだったらしい。椎と能見は境内にて対峙した。勝負は一合目で決着した。能見に抜く間も与えず、一刀の下に斬り捨てたという。

これには布施派の重鎮たちも閉口せざるを得なかった。よもやこれほどは、ゆめゆめ思わなかったに違いない。布施様の先見の明には舌を巻く他ない、いやそれ以上に椎の実力を認めざるを得ない。重鎮たち以下城下の者は皆、椎という男に畏怖すら覚えた。

これに伴い、椎は布施様の懐刀として、藩政に口を挟むことすらできる立場になった。海運のことやら財引き締めのことやらを耳打ちし、それがことごとく当たった。藩債の担当となっていた能見が乗り移ったかのようなだったという。

私が椎と能見が斬り合った荒れ寺を訪れたのは、夏至の夕暮れ刻であった。陽は長く、蟬が鳴き始めていた。亡き藩士が後妻の病状を看て、その帰りにふと寄ったのだった。

山門下に知った顔があった。椎であった。私は何とはなしに声をかけようと思ひ、近づいていくと、そこにはもう一人、萎びた枇杷のような男がいた。後に聞いた話であるが、それが山木勘兵衛であった。

山木は関所に詰める役人で、だらだらと暇を弄ぶことを生きがいとする男だったという。剣はおろか、無学で、ずうずうしさだけは一級品という話であった。

そんなどうしようもない男が椎の眼前に立っていた。私は木の陰で、そんな二人の様子を見守っていた。

椎は平生と変わらず落ち着き払っていた。対して山木はふるふると震え、怯えているように見えた。

「能見には気の毒なことをしたな。しかし敵討ちは止めた方が良い。己も貴様もまだ二十の半ば、死に急ぐのは賢くない。まだ今なら己の胸の内で留め置いてやらんこともない」

椎の言葉に、山木は唇をふるふると震わせた。

「の、能見さんは居眠りをして、駆け落ちに關所を越えられた己を叱ったけど、お咎めからかばってくれた。そ、それに盗人を捕まえたときは、ま、ま、饅頭をくれた」

「ふん。一飯の恩義に殉ずるか。もう一度忠告しておく。止めておけ」

椎が言ったが早いか、山木は刀を抜き、異様な掛け声と共に斬りかかって行く。

それを見計らったかのごとく、椎は半円の鰐に手を通し、刀を握った。だが椎が刀を抜くことはなかった。

「抜けない。抜けないッ！」

その次の瞬間、椎は肩から腹にかけ割かれていた。けれども椎の肩口で、山木の刀は真つ二つに折れ、止めを刺すことができない。山木は、膝から崩れた椎の腰に下げた刀を抜くと、椎の胸に突き刺した。椎は絶命した。

開いたままの喉はからからに渴いていた。山木は息を整えると、椎に突き刺した刀を抜き、自らの腹へと突き立てた。事は瞬く間に起こり、瞼を閉じる前に終わった。

見聞きした限りを布施様にお伝えしたときに、布施様はこんなことを仰っていた。

「“ふいろそふい”の語義を知らんか。刀の銘なのだそうだが」

「さて、聞いたことがあるような気がします、語源は蘭語ではないように存じます」

「そうか……。もうあの刀はさびて、使い物にならなくなったよ。処分するかな」
はあ、と私は返事ともつかない風に頷いた。

「そういえば、以前世話になったという異国の医師が、二月ほど後に出立するそうだ」

布施様の言葉を私は思い出している。ドクトル・ジーボルトは明日、帰国する。